

「逆らわない者は味方である」

2014年4月14日

主イエスは、12弟子を選び、神の国の宣教に遣わした。神の国とは、主イエスの名によって、神の愛を宣言し、病気や悪霊に取りつかれた者が癒される、人間存在の尊厳を回復する神のリアリティーが露わになった「場」である。弟子たちの宣教は主イエスから受けた権能によって、素晴らしい成果をもたらした。その宣教から帰ってきたヨハネは、勢い込んで「先生、お名前を使って悪霊を追い出している者を見つけましたが、わたしたちに従わないので、やめさせようと思いました」と報告している。ヨハネは、主イエスから「ボアネルゲス（雷の子ら）」というあだ名をつけられている。ゴロゴロとすぐに怒り出す気性の荒い弟子であったようだ。彼は、主イエスの名を使って悪霊を追い出す者を見つけ、仲間ではないと排除した訳である。それに対し、主イエスは「やめさせてはならない。わたしの名を使って奇跡を行い、そのすぐ後で、わたしの悪口は言えまい。わたしたちに逆らわない者は、わたしたちの味方なのである」とたしなめている。

北村慈郎牧師は、未受洗者も聖餐に与ってよいと、教会総会で決議し、その聖餐式を執行した。教団施行部は、教憲・教規に違反するとして「免職処分」にした。免職とは人格権と生存権を奪い取ることである。未受洗者が聖餐に与ることの良し悪しは、神学的に決着はついていない。不確かな教憲・教規に違反するとして、仲間を切り捨てた訳である。

主イエスの時代のファリサイ派の人々は、自分たちを律法を厳守する「義人」とし、律法を守れない人々を「罪人」と烙印し、共同体から「村八分」、排除した。教団施行部は、ファリサイ派と同じやり方をしている。味方をも「律法違反」と断罪し、我こそはと「正義」を振りかざしている。

この構造は、今日、至る所で見られるのではないか。相手を否定的に評価することが、物知りで、知的であると自己宣伝している。些細な違いをあげつらい、本来、仲間である人を、敵として、向こう側に追いやる。

二大政党によって、政権交代を可能にしようとしたが、野党は互いの違いを主張し合い、分裂に分裂を重ねている。得をするのは、与党である。権力は、相手を分断させて力を奪い、自らの利益を揺るがないものにする。

違いではなく、同じを見つけ、「イエス・同意」と言って、同じ方向を共有する。「逆らわない者は味方である」という柔らかな精神が、明日を創っていくのではないか。